

グローバル都市マニラと都市底辺層 (3)

周縁のスクオッターにおける新しい女性サービス労働者

立教大学 太田麻希子

1. 目的

フィリピンの外貨獲得源は、海外就業者の送金、輸出向製造業に加え、近年では BPO (Business Process Outsourcing) 産業に拠るところが大きい。それに伴い、マニラ首都圏ではコールセンターなど新しいサービス雇用が増加した。これは新国際分業の下での途上国における「労働力の女性化」の最新形態である。その最前線にあるのが、大卒レベルの学歴の女性たちである。マニラのグローバル化の進展はスクオッターにどのような影響をもたらしたのか。報告者は別稿で上記の外貨獲得産業の転換と、マニラの女性労働や低所得層へのインパクトについて、行政統計を用い広く論じた上で、具体的な地域の調査による実証分析が必要とした (太田 近日刊行)。

2. 方法と調査地

この課題はグローバル都市マニラの「都市底辺層」の実態解明に繋がる。ここでは報告者が調査を続けてきたマニラ首都圏ナボタス市のスクオッター集落 (M 地区・仮称) の女性労働に焦点を当てる。ナボタスはマニラの都市化の核であるマニラ市 (旧都心) に隣接する。産業は漁業・港湾に拠り、従来から女性の就業率は低く、BPO 産業が集積する首都圏の新都心群への交通利便性も低い。M 地区のアクセスも、安全面や交通渋滞など困難が伴い、住民の就業は地元産業 (= 漁業・港湾業など) のインフォーマル職種や近隣で操業する小自営業が多かった (太田 2009)。

しかし近年、都心部に通勤する対人サービス賃労働者が増加しつつあり、マニラのグローバル化 (= グローバル都市化) の下、当該地域は労働市場を通し中枢機能に組み込まれつつあるように見える。顕著に表れるのが大学中退~大卒の 20~30 代の女性就業者である。

3. 考察

これらの女性の多くはマニラ生まれ都市第二世代であり、地方出身でローカルなインフォーマル職種に就いてきた親を持ち、都市底辺層を出自とする。旧・新都心部の情報、医療、教育産業等で働くが、雇用・勤務形態などから青木 (2013) の言う「新中間層」と「新労務層」に二極化しているように思われる。特に前者は都市経済の中枢に近い職に就き、より長い通勤や夜勤を行ない、生活水準も多くの住民と異なることから、スクオッターの「浮き島」のように見える。

報告では、M 地区の新しい対人サービス賃労働者からマニラの「新中間層」「新労務層」について考察し、こうした新たな労働と従来のインフォーマル職種の労働の共通点と相違点を探る。また、周縁にあり、依然、多くの住民が成長から疎外されている M 地区から、「都心 (= グローバル都市マニラの中核) に勤務する」ことの当事者にとっての意味を問う。特に、①女性が長時間通勤や昼夜逆転生活を行なうこと、②生活水準が上昇すること、③居住空間であるスクオッターと労働空間である都心部でのギャップの経験、④当事者の自己認識、といった面を明らかにすることが必要であることを、これまでの現地調査のデータと先行研究検討に基づき主張する。

参考文献

青木秀男, 2013, 『マニラの都市底辺層—変容する労働と貧困』大学教育出版。

太田麻希子, 2009, 「重層する戦略の場としての住民組織—マニラ首都圏のスクオッター集落住民組織における女性の活動事例から」『アジア研究』55(3): 72-91.

———, 「マニラにおける外貨獲得産業の転換と女性労働へのインパクト—BPO 産業の影響を中心に」『アジア経済』(近日刊行)。